

南太平洋最後の王国 トンガ



威風堂々たる立派な体格のトンガ人の中に紛れ込んでいると、『ガリヴァー旅行記』に出てくる巨人の国——王様と貴族、それから農民が平和に暮らすプロブディンナグ国——のモデルはトンガ王国、という説を信じたくなる。

まるで絵本から出てきたようなかわいらしい王宮があるトンガタブ島はのっぺりと平らで、ロバルトブルの海に囲まれた陸地に自立つのはヤシの木ばかり。風景は日本人の抱く「南の楽園」のイメージにぴったりだけれど、「一歩足を踏み入れれば、この国が観光客でにぎわう」「解放感あふれるビーチリゾート」とは趣を異にすることが、すぐに分かる。太平洋最後の王国へようこそ！

「文」南田登喜子
「写真」ミディ中嶋

日曜日はちょっぴりおめかしをして、みんな教会へ出かけるハレの日。総じて、大柄でふくよかな人が目立つ



『ガリヴァー旅行記』の世界へ

子供たちが木に向かって石を投げる。たわわに実ったマンゴーを落としているのだ。その場でかぶりつきながら、「食べる？」と一つ分けてくれる。緑色でまだ熟れてないように見えたのに、皮をむいてかじってみると、中身は黄色くて、ものすごく甘い。びつくりして目を見開いたわたしを見て、遠慮がちに、でも、うれしそうにクスクス笑う。

景色を撮影しようとフォトグラフアールがカメラを構えると、自分たちも撮って、とりクレスト。興奮してカメラに近付きすぎる子供らに、「そんなに近寄ったら撮れないから、ここから前に出ちゃダメよ」と地面に線を引くと、一番年上らしき男の子がみんなを整列させる。が、それ

もつかの間。ピースサインやポーズをキメる子供たちはカメラにどんどん近づいていく。

物の根で作る飲み物」を飲み交わしながら、夜更けまで年配者の話に耳を傾け、議論し、楽器を奏で、歌う。女たちは軒先で「タパ」と呼ばれる樹皮布の材料となる木の内皮を木槌で叩きのぼしたり、作業所に集まってカゴやマットを編んだりしながら、歌ってしゃべって大笑い。通りがかりに、「マロ・エ・レイ（こんにちは）！」と声をかければ、はにかんだ笑顔と挨拶が返ってくる。ぶらぶら道路を歩いていくと、出くわすのは放し飼いの豚。親豚が道を渡れば、子豚が何匹もひよこひよこ後を追ってくる。儀式や行事では、その子豚の丸焼きが一番のごちそうになる。

なんだか懐かしいような、のどかで幸せな光景——それがトンガ王国の日常だ。

『ガリヴァー旅行記』の初版が世に出たのは1726年のこと。イギリスの海洋探検家キャプテン・クックが初めてトンガを訪れる50年近くも前に、アイルランド人の著者が南太平洋に浮かぶ小さな王国の存在を認識していたとはちょっと考えにくい。現代のトンガが、280年以上も昔

の物語に違和感なく重なり合うのは、独特のゆるやかな時間の流れの中で、この国の核のようなものがほとんど変わらなかったからだろう。

トンガは1900年から70年間、英国の保護領下に置かれたものの、ほかの太平洋島嶼国のように植民地支配されたことがない。西洋社会とのかかわりが進んでも混血の割合はごくわずかで、今も国民のほとんどを占めるのはポリネシア系だ。キリスト教を受け入れながらも、伝統文化は脈々と継承され、日々の暮らしの中にしきたりや慣習が溶け込んでいる。

王国を支えるバラングとの関係

この国に初めて足を踏み入れた外国人がまず驚くのは、人々がゴザのようなものを腰に巻いていること。「タオヴァラ」と呼ばれるこの民族衣装は、冠婚葬祭をはじめとする儀式ではもちろんのこと、教会やオフィスなど公の場で日常的に目にするものだ。熱帯なのにタンクトップやショートパンツ姿をほとんど見かけないのは、肩や膝を露出しないの

- 1 距離を保って、子供たちの写真を撮るのは至難のワザ
- 2 地元産の野菜や果物は一山につきT\$2〜3（約100〜150円）
- 3 サープ役の未婚女性を除くと男ばかりの「カヴァクラブ」
- 4 乾燥させた木の根のエキスの搾り汁を渡したものが「カヴァ」
- 5 植物の繊維を使ってタバやマットを作るのは主に女性の仕事
- 6 飼われているというけれど、見た目は完全に野豚……
- 7 旅行者への手工芸品の販売は、貴重な現金獲得の機会
- 8 トンガタブ島ーヴァヴァウ島間の飛行機からの眺め

1	2
3	4
5	6
7	8

がマナーだから。男性はビーチ以外で上半身裸になると罰金で、たいいていの人は泳ぐときだって服を着たまま、と慎み深い。

例外は、「パランギ」とリゾートの組み合わせ。パランギ＝外国人のことで、直訳すると、「空から来た人」という意味になる。その昔、高いマストのある船に乗ってやってきたキャプテン・クック一行をパランギと呼び、短縮されて「白人」を指す言葉になったという。

王族、貴族、平民という身分だけでなく、家筋や性別、年齢といったさまざまな属性によつて序列や力関係が決まるなか、パランギはあくまで階層の外の存在。男と女、年長者と若い衆……といった立ち位置によつて厳然とある役割分担や制約に対して、「よそ者」だからしょうがないというあきらめなのか、「客人」として特別扱いされることが多いのだ。

パランギとのパートナーシップは、トンガの経済を支えるもつとも重要な要素の一つになっている。道路や学校、病院の建設、給水施設・下水道の整備から、農業・漁業の調査や

ることを夢見ているのだろう。

ここでは女性もふくよかな方が美人とされ、奥さんが色白で肉付きがよいのは、ダンナに甲斐性があることを示すのだそう。ただし、近年は食生活の大きな変化によつて不健康な肥満が増えていることが社会問題化している。国際協力機構（JICA）が派遣する青年海外協力隊員の職種には、エアロビクス指導員まで含まれている。

鯨たちの楽園

小規模農業・漁業のほかにこれといった産業がないなかで期待されているのは、観光産業。出産・子育てのために回遊してくるザトウクジラと泳げる7月後半から10月は、拠点となる離島のホテルやボートが予約でいっぱいになる。何しろホエール・ウォッチング・ポイントは各地にあるけれど、ホエール・スイムのできる場所は世界でも数カ所だけ。わざわざこのためにやってくる旅行者は少なくなく、繰り返し訪れるクジラ・マニアも珍しくない。そういうわたしも、もう一度広大な海で母子クジラ



漂うようにゆったり泳いでいた母子クジラ。人間が観察しているのか、されているのか？



ヨットマン憧れの地・ヴァヴァウ島。太平洋を横断中のヨットのほとんどが立ち寄る



青い空に映える赤屋根に白壁の王宮。首都ヌクアロファのウォーターフロントにある

開発・振興にいたるまで、さまざまな経済社会基盤の構築・拡充に援助国や国際機関が大きく貢献してきた。外からやってくるばかりではない。約11万人と推定される国内の人口と同数、あるいはそれ以上のトンガ人が国外に暮らしているといわれている。トンガでは、いまだ物々交換による自給自足的なライフスタイルが主流で、現金収入を得られる常勤の仕事に就けるのは少数の限られた人たちだけ。チャンスを求めて親戚縁者を頼りに海を越えるのは、ごく一般的な選択で、主にニュージーランドやオーストラリア、アメリカなどに住む在外トンガ人は、家族にせつせと仕送りをする。海外からの送金額はGDPの3分の1にも達する。

「主要産業はラグビー・ブレイヤーの『輸出』だよ」とトンガ人が冗談で口にするように、高校生から国代表レベルまで、海外で活躍するラグビー選手は、人口比からすれば驚くほど多い。筋肉率が高く、がっしりした骨格を持つトンガ人の瞬発力とパワーには定評がある。夕暮れ時に裸足でラグビーボールを追いかける子供たちも、いつか海外でプレーす

と一緒に泳ぎたくて帰ってきた。

クジラと泳げるのは、一度に4人まで、という決まりがある。潮吹きを見つけると近寄ってしばらく観察。OKとなれば、シュノーケルギアを付けてそつと海に入る。体長約15メートル前後の母クジラの傍らで、子クジラは浮上したり、くるつと回転したり、リラックスして遊んでいるように見える。何でもヴァーチャルに体験できる時代になつても、今この時しかないリアルな世界には到底かなわない、と心から思う。

ホエールスイムで有名なヴァヴァウ島は、本島の北東約300キロに位置している。入り組んだ海岸線に守られた天然の良港があることで知られ、太平洋横断中の世界各国のヨットマンが補給や休息のために立ち寄り、時には豪華客船もやってくる。ダイビングやゲーム・フィッシングなどのマリンスポーツも盛んだが、環境や資源を守りつづいかにして年間を通じて観光客を魅了するかというのは、これからの課題だろう。

日付変更線が通っているのは、ちょうどこのあたりの海。西



1	3
2	4
5	

- 1 カヴァは冠婚葬祭の儀式に欠かせない伝統
- 2 教会からは昼も夜も賛美歌が聞こえてくる
- 3 弔問客には食事をふるまう習慣がある
- 4 タロイモ、ヤムイモ、パンノキなどが中心
- 5 棺はタバやマットを重ねた上に安置してある



日本政府の寄付でできた消防署。
開発に携わった援助国を示す看板は、随所で見かける



経175度あたり、つまり西半球の端にあるトンガは、おもしろいことに協定世界時より13時間早い標準時（UTC+13）を採用している。日付変更線はトンガの脇でちよつぷり東にせり出しているわけだ。2000年の到来が迫ったころ、トンガは「世界一早く2000年を迎える国」として、観光客を誘致した。ところが、赤道直下に東西約4000キロに渡る領海を持つカリバス共和国が、最東端にあるカロリン島（後にミレニアム島に改名）の東側まで日付変更線をずらし、トンガより1時間早い標準時（UTC+14）を東部の島々で採用した。臨時にサマータイムを導入して、トンガ政府が対抗したという話はおそろく本当なのだろう。

賛美歌が響く弔いの儀式

トンガはキリスト教の布教がもつとも成功した国の一つと言われるだけあって、あちこちで教会を見かける。安息日の日曜日に行きとくこと、伝統料理のウム（南太平洋諸

島に伝わる焼石を使った蒸し焼き料理）を作って食べることに、そして休むことだけ。スポーツや娯楽は禁止で、飛行機だって飛ばない。かろうじてオープンしているのはパン屋と、パラングの利用するリゾートやレストランだけという状況のなか、所在なさげにしているのは観光客ばかり。トンガの人々は実に心地よさそうにメロウな時間を過ごしている。

首都ヌクアロファでも、離島でも賛美歌が夜通し聞こえたのは、亡くなったばかりの人のために、聖歌隊が交代で歌い続けていたからなのだろう。葬式は何日にも渡って執り行われ、代わる代わる弔問客が訪れる。

「代表的なトンガ文化のひとつだから」と言われ、ある日、葬儀が行われている教会へ連れていってもらった。タオヴァラを貸りてきてよかった、と思ったのは、「こちらへどうぞ」と招かれて教会の中に入った時のこと。そつと参列させてもらうつもりだったのに、そこは祭壇や遺体に近い最前列の席の横にある出入口で、教会中を見渡せる場所。心の中で亡くなった子供に謝りながら隅の席に座り、目を閉じてわたし流の

お祈りをする、興味深げに視線を投げかけていた人たちも、それぞれの想いに戻っていった。場所を移したホールでは、さんざん遠慮したにもかかわらず、牧師席のあるテーブルで食事をふるまわれて当惑した。地域の一大イベントだから、来るもの拒まずでもてなすのが習慣、と聞かされてはいても、どうも落ち着かない。時には何百人分、何千人分の食事を用意するというから、前国王が崩御されたときは、さぞかしすごい騒ぎになっただろう。

変わりゆく南の島

目上の人を敬い、弱い者を守り、寄り添いながら、時間も空間も物もみんなで共有してきたトンガ人。「家族」の範疇は直系のみならず、血族・姻族を広くカバーし、強い絆で結ばれている。裕福じゃなくとも、畑や海から獲れる自然の恵みをみんなに分ち合えば、飢えることはない。隣近所や教会を中心にしたコミュニティの人間関係も濃厚で、家族や共同体の寄り合いや共同作業、つきあいは何よりも優先される。その日必



主食はイモ類。「ウム」と呼ばれる伝統的な料理法では、地面に穴を掘り、熱した石を使って地中で蒸し焼きにする。バナナやタロイモの葉、ココナッツの殻などを鍋や皿の代わりに用い、屋外の調理は男性が担当する。

トンガの 伝統料理

🌿 地中オープンを使って蒸し焼きに



本来のウムは、床にずらりと一列に並べ、座って手で食べる。ご馳走の子豚の丸焼きや、生魚をココナッツミルクとライムでマリネしたトンガ風刺身の「オタイカ」などと一緒にテーブルへ並べたら、Tongan Feast (トンガの饗宴) のできあがり。手間暇かかったおもてなし料理はどこか懐かしく、ほっとする味わいだった。



首都ヌクアロファのメイン・ストリート



タオヴァラはトンガの風景に溶け込んでいる



要なものがあればよいという節度ある暮らしのなかで育まれたおおかさ、強さ……これらがここにきて揺らぎ始めている。

最近、一時帰国者が冠婚葬祭の儀式などで本来の序列よりも上座に座ることがあるという。自分が稼いでいる、一族を支えているという自負なのだろう。そういう新たな価値感、今のところ勘違いだと受け止められている。曰く「まあ黙って座らせておいて、後で豚の数頭でも買わせればいい」。一方、ろくに働きもしないでたかってばかり、という怠け者もいるらしい。

前国王の喪が明けて間もない06年11月には、民主化急進派と扇動された若者が暴動を起こし、首都中心部（CBD）の8割が放火や略奪などによって破壊された。日本の外務省が発出した「十分注意してください」という渡航情報は、本島トンガタプ島に対してのみ継続中だったが、目の前にいる温和なトンガ人と、「暴徒化」という言葉がわたしにはどうやっても結びつかない。

「まるで昔の日本みたい」とトンガで何度思っただろう。それは時に子供

供のころの記憶のなかの日本であり、時に想像上の古き良き日本とでもいうものだ。グローバル化の波が押し寄せるなか、昔からあるものを守るだけでは立ちゆかないかもしれない。面倒なしがらみもたくさんあるだろう。それでも、経済価値に換算できないものを持ち続けてほしいと願うのは、ノスタルジーだろうか。

